

目的 学校の制服についての意識、イメージ、実態調査は数多く行われているが、春になると巷では制服是否論が持ち上がる。その中で、しばしば問題になるのは、制服着用がその後の衣生活に対する創造性や計画性およびファッション性の欠如につながるのではないかということである。そこで今回は制服着用の有無が卒業後の衣生活に対する態度や行動にどのような影響を与えているのかを知るために調査を行い検討した。

方法 S.61年10月、女子大生 234名、短大生 170名を対象に質問紙調査法による調査を行った。主な質問項目は、制服の有無、賛否、評価及び衣生活に対する態度である。集計分析には、単純集計、クロス集計、因子分析、林の数量化2類の手法をもちいた。

結果 制服着用の有無については、小学校では31.8%、中学・高校では90%以上があったと答えている。賛否については、高校での制服着用者の場合、個性表現の面では評価が低いものの、制服があったほうが良いという者が79.5%あった。制服一般に対する態度でも「毎日の組み合わせに悩まずにすむ」などの賛成意見と「手入れがしにくく不衛生」などの反対意見があったものの、全体としては制服着用賛成の者が多かった(71.1%)。このような制服に対する態度構造を明らかにするために因子分析を行った結果、「制服への反発」「体制順応」「集団への同調」「実用面への評価」の四つの因子が抽出された。林の数量化2類での分析の結果、制服着用への賛否をわける要因として「拘束感」「集団の秩序の保持」「学校への愛着の度合」「服装の変化を求める度合」「制服の有無」が大きく寄与していることがわかった。